様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１６日現在

機関番号：８４６０３
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８７２０２２０
研究課題名（和文）統一新羅期の道具瓦集成

研究課題名（英文）Research on Antefixes of Unified Silla

研究代表者
岩戸　晶子（IWATO AKIKO）
奈良国立博物館　学芸部工芸考古室・研究員
研究者番号：５０３５９４４４

研究成果の概要（和文）：
日本の瓦生産において大きく影響を与えたと考えられる統一新羅の様相を日本と比較検討することを目的として、特に研究が遅れている道具瓦を取り上げた。これまで文様に偏りがちだった鬼瓦と鴟尾について出土数が多い統一新羅の資料を対象に集成を行い、これまで研究・調査によって明らかにしてきた技術的観点から見た調査成果を反映させつつ、製作技術など技術的観点にもとづくデータを採取し、基礎的資料を作成した。この成果が今後、韓国で公表されれば、韓国の古代瓦研究だけでなく日本との比較研究にも大いに役立つものである。

研究成果の概要（英文）：
I have researched the Antefixes; construtional roof-tiles of Unified Silla on the purpose of comparison to Japanese roof-tiles. Those of Unified Silla gave influence to those of Japan, but most archaeologists in Korea or Japan had not paid attention to the Antefixes except for the study of the design. And so, I tried collecting the examples of these tiles in Unified Silla and getting all sorts of data related with roofing techniques and with production techniques. Resultingly, I could get various basic data about the construtional roof-tiles of Unified Silla. This data will prove to be very useful in not only the study of the ancient Korean roof-tiles but the comparative study of Japanese and Korean.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,300,000	0	1,300,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	660,000	4,160,000

研究分野：東アジア考古
科研費の分科・細目：
キーワード：考古学、道具瓦、統一新羅、鬼瓦、鴟尾、国際情報交換

１．研究開始当初の背景

筆者はこれまで瓦の文様だけに依拠しない新しい瓦研究の方向を示すために、研究が未発達であった鬼瓦や鴟尾といった道具瓦を取り上げ、屋根に葺かれる使用状況を前提として鬼瓦や鴟尾がどのように製作されてきたか、その技術がどのように確立し、進化してきた

かという点に着目して分析を行ってきた。これまでの研究成果によって、「棟端を塞ぐ」という鬼瓦・鴟尾の機能、複雑な構造を採る棟との関係といった、軒瓦とは異なる鬼瓦・鴟尾独自の「技術的要素」に立脚した検討をおこなう必要性があり、そうした検討を行うことによって古代の建築技術の一様相を新たに明らかにしうることを提示した。

鬼瓦や鴟尾はその見た目から、展覧会への出品も多く、研究者の目に触れる機会は多かったが、真の考古学的検討が加えられる機会は、軒瓦の研究や近年進む平瓦・丸瓦に比べて著しく少なかったと言わざるを得ない。
韓国においては長く瓦研究が美術史分野であったこともあり、軒瓦の文様研究が主流を占め、近年、文様以外の軒瓦や平瓦・丸瓦の製作技法などを絡めた考古学的分析が端緒についたばかりである。

道具瓦についてはさらに研究が少なく、「韓国古代鴟尾の考察」（金有植 1993）や「新羅鴟尾に対する一研究」（金有植 1996）や「新羅鬼面文様における研究」（宋香珍 1983）などの論説があげられるが、いずれもその文様論や概説的な論説が多く、考古学的手法により出土資料を分析し、検討を加えたといえる論文は管見の限り把握していない。

これまで日韓での瓦の比較研究は古くは軒瓦の文様、近年は製作技法など非常に詳細に行われてきた。しかし、その研究は軒瓦に偏り、一般的に言われているような日本の道具瓦が古代韓国の影響下に成立したとする考え方は実は感覚的なものでしかない。鴟尾については６世紀代の百済との密接な関係は明らかになっているが、日本の６－７世紀代の蓮華文鬼瓦の成立と発展、８世紀の鬼面文鬼瓦いわゆる“鬼瓦”の成立は百済や統一新羅とどのように技術交流を経たものなのかについては全くわかっていないという状況下にあった。

２．研究の目的

これまで私は日本国内でもあまり検討されてこなかった道具瓦を研究対象とし、瓦葺技術や製作技術などの技術的観点に基づく新しい研究手法を確立してきた。今回はその研究手法を海外、特に日本の古代瓦と関わりの深い朝鮮半島の資料に応用しようとする試みである。

これまでは古代日本の鬼瓦・鴟尾資料をはじめ、韓国・統一新羅期の資料を分析してきたが、日本の鬼瓦や鴟尾に多大な影響を与えたといわれつつ、分析対象とされてこなかった統一新羅期の道具瓦資料に考古学的分析を加えることを目的とする。文様研究の成果では説明のつかない建築分野に関わる瓦葺技術の様相を鬼瓦や鴟尾によって明らかにし、将来の日本資料との比較研究を見据えた基礎的データの蓄積を目的とする。

３．研究の方法

統一新羅期の道具瓦をできるだけ多く集成、調査し、データを採取することを目的としたが、実際には、所蔵先の事情で資料を実見することが難しいケースに多く直面した。

その結果、統一新羅期の王京があった慶州の王室の苑池と考えられる雁鴨池遺跡の資料に限定し、悉皆調査を行った。雁鴨池遺跡出土資料に注目したのは、統一新羅期を代表する遺跡であり、最も瓦の出土数が多いこと、かつ遺跡の存続時期が統一新羅期にほぼ限定的であることによる。

調査の主眼は文様だけでなく、技術的要素を反映すると考えられる外形、屋根との連結部分の形態や作り方、製作技法や笵構造の痕跡である。

これまで、完形品に復元された資料ばかりが取り上げられる傾向があったが、破片資料も重視し、詳しく観察していく。同時に、完形に復元された資料の復元部についてどこまでが事実でどこからが推測に基づくのかについても注意した。

４．研究成果

各所で行った統一新羅期の道具瓦の調査であるが、韓国国立慶州博物館所蔵の雁鴨池出土資料の悉皆調査が主眼に置かれる結果となった。前述したように雁鴨池はその存続が統一新羅期に限定され、統一新羅期のさまざまな遺物が大量に出土した最重要遺跡である。その遺物は統一新羅期にほぼ限定されるという意味で統一新羅研究において非常に重要な位置を占めると考える。瓦の出土も非常に多く、同笵関係などを追いかけつつ入念な調査を行ないつつ、雁鴨池出土鬼瓦資料全資料の調査を完了した。データ整理も平行して行い、そのデータは国立慶州博物館と共有しつつ情報交換も行った。このデータが公表されれば今後の基礎資料となりうるものであり、成果の発表については、慶州博物館と現在も協議して進めている。

韓国における古代瓦の考古学的研究はまだ端緒についたばかりであり、特に道具瓦についてはこれまで殆ど行われてきていない。韓

国国立博物館とのこれまでの学術交流や当館が国立慶州博物館で開催した展覧会の担当者として培った人的つながりから、今回の調査研究が可能となった。今後は今回の成果の発表を通じて、さらに日韓の比較研究などを進めていきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
岩戸　晶子（IWATO AKIKO）
　奈良国立博物館　学芸部工芸考古室・研究員
研究者番号：50359444

(2)研究分担者
　　なし

(3)連携研究者
　　なし